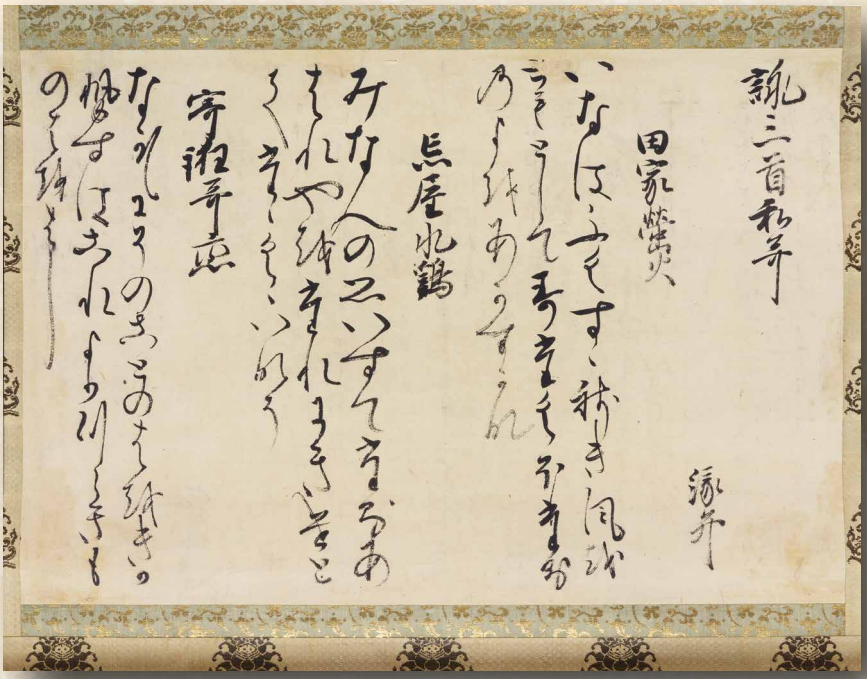
ISSN-1883-1931

大学共同利用機関法人　人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニューズ

No.41
AUTUMN 2015



『春日懐紙』（縁弁「田家螢火」）

目　次

メッセージ

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」への期待… 伊藤　早苗　1

研究ノート

仁和寺旧蔵古活字版『魁本大字諸儒箋解古文真宝（後集）』について … 林　望　2

近代茨城のジャーナリスト・長久保紅堂の「発見」 …… 西村慎太郎　4

― 連携研究「大震災後における文書資料の保全と活用に関する研究」と茨城史料ネット ―

「国文学論文目録データベース」の、あまりよく知られていないこと … 浅田　徹　6

トピックス

第8回日本古典文学学術賞受賞者発表 …… 8

第8回日本古典文学学術賞選考講評 …… 内田　保廣　8

文部科学省における当館大型プロジェクトの展示 …… 田中　大士　9

第39回国際日本文学研究集会 …… 10

日本学術会議と公開シンポジウムを共催…… 谷川　惠一　12

第1回日本語の歴史的典籍国際研究集会「可能性としての日本古典籍」… 井黒佳穂子　13

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況 …… 14

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」への期待

伊藤　早苗（九州大学教授，国文学研究資料館運営委員）

私の専門は物理学であるが、縁あって国文学研究資料館の運営委員を務めている。文系の研究機関に理系からの風をという館のご意向であろうと思い、遠慮なくお引き受けした。

さて、平成26年に、日本で初めて人文系の分野の大型フロンテイア事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」が実現した。このご時世、このような大きな事業を立ち上げ、それも10年間で成果を出せというのは、何と幸運な事か！

学術の大型プロジェクトは「大型装置研究」と「大規模研究」に大別されるが、大規模研究として採択された当時から、文部科学省の科学技術学術審議会・学術分科会の議論でも、このプロジェクトへの期待は大きい。

期待が大きいという事は、その成果への思い入れがいろいろな分野の人から出て来る。思い入れと思い込みが錯綜している場合もあるが、それだけ事業を成功させてほしいと願っているからである。当初より、遠く「理系女」の立場から、今西館長始め皆様のビジョンが、日本学術会議での「マスタープラン」への採択、文部科学省の諸委員会での「ロードマップ」への採択、そして「フロンテイア事業」としての決定がなされる経緯を見て応援して来た者として、とにかく「がんばって」とエールを送りたい。新しいものを作る時には人それぞれの方法論がある。やり方はやり方として目に見える成果を出して示して欲しい。

文理多くの分野の方々で本プロジェクトを審議し、そこで応援するとしても、言葉の違いに戸惑う事が多い。

「データベース化」という言葉の解釈の違いがあり、思い惑う。そもそも「理系と文系」という発想の違いに加え、理系内部でも「物理系と情報系」の違いがあり釈然としない。その上、「文系」のなかでもそれぞれの方々での定義に違いがある。

また、本プロジェクトの学術会議のマスタープラン案には、フルテキスト化という課題も含まれていた。30万点のすべてをテキスト化するとは、壮大なビジョンであるが、その実現にはどういうプロセスが必要で、どのくらいの頭脳と時間とを必要とするのか？

一方で、「テキスト化された本」は、身近な「日本古典文学大系」などはもとより、近代になってからの活字テキストの蓄積には膨大なものがあると聞く。それら近代の文化遺産との関係は如何。

理系の私にとって、文系の古典籍データベースについて、価値の高さやインパクトの大きさを充分に認識出来ないだろう。しかし、これが目指す典籍データベースの典型例ですと示されれば、応援にも力が入る。そうした簡単な説明書を、本を、ファイルを、用意してもらえれば、分かりやすくなるだろう。

データを保存するのに、現在のIT技術では日進月歩なだけに長い保存は自明では無い。300年とか500年、700年を目指すとも伺う。Technical obsolescenceという言葉があるが、古い技術は時とともに使いたくとも使えなくなってしまう。どの程度を考えるべきか、予算とともに考えて欲しい。

「日本語の歴史的典籍」とは日本人が考えて書き記した事の根幹であり、日本人が考えた事・考えた日本人、その双方を知り理解するにはこの道を通ることが欠かせない。このプロジェクトにおいては、国文学研究資料館の従来の守備範囲を超えて、理学系の古典籍のデータベース化等も始まっている。日本学術会議のシンポジウム「日本語の歴史的典籍データベースが切り開く研究の未来」では、現代数学の碩学上野先生の和算のご講演をはじめとし、医学や料理に亘る研究展開が活発に議論されている。上野先生のテーマは、和算資料が示唆する数学の将来であり、古典籍から開けて行く未来である。自然科学の研究にあっては、未来を予測する為に、過去にあった事を知る研究の重要性が広く理解されている。歴史典籍に遡って、大地震、超新星爆発、等々稀な事象や、自然、天体、気象などについて何かが記されているのだろうか？古典籍から開けて行く未来にむけて、希望も高まる。そのような潮流の端緒が日本語の歴史的典籍データベース事業によって先導されることを期待する。これらは新しい試みであり、新しい試みが国の予算を得て発展して行く事はまことに望ましい。

日本語の歴史的典籍データベース事業が、多くの人々を知と思索の源泉へ誘い導く事を願って。

私の研究を支えてきた鉛筆たち

仁和寺旧蔵古活字版『魁本大字諸儒箋解古文真宝（後集）』について

林　望（作家・書誌学者）

話は遥か四半世紀の昔に遡る。

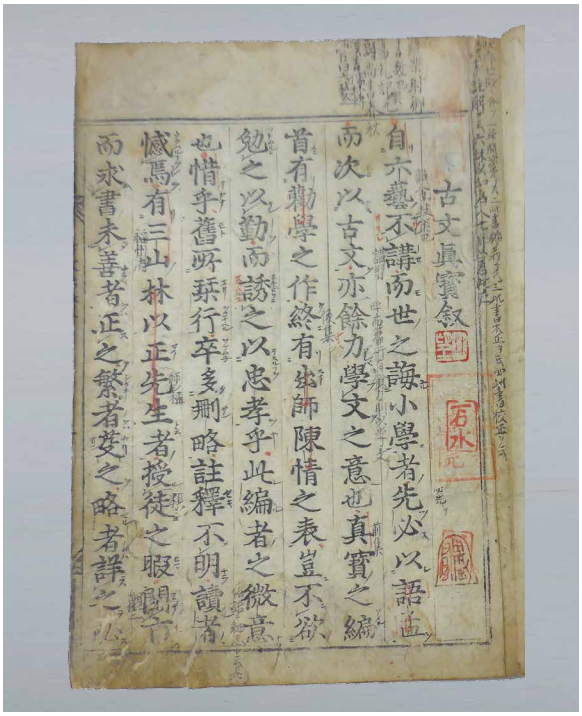
ケンブリッジ大学に静かに眠っていた日本古典籍を、同大学のピーター・コーニツキ君と私と二人だけで悉皆調査し、それを先師阿部隆一博士の教えられた方法に基づいて目録として著録したのが『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録』（1991年、ケンブリッジ大学出版刊）であった。この目録はその調査から著録、入力校正等、一部索引作成について当山日出夫君の助力を得たほかは、なにもかもコーニツキ君と私と二人だけでやった。そのために1985年に調査を開始してから、1991年に世に出るまで六年の月日を要したのである。実はこの著録と並行して、東京駒込の東洋文庫に所蔵されている岩崎文庫の善本解題を、亀井孝先生を代表者とするプロジェクトチームで著録しつつあったので、その一員であった私はほとんど過労死しそうな日々を送っていた。これも同じ年に『岩崎文庫貴重書書誌解題（1）』として世に出たが、この過程で、当時私が書誌学を指導していた私的な教え子であった山口謡司君にずいぶん助けてもらったのである。いわば、オン・ザ・ジョブ・トレーニングとでもいうところであった。

やっとその版下入力も終わろうとする頃、ケンブリッジ大学のほうでは、コーニツキ君が主唱して、全欧州の日本古典籍を網羅的に書誌調査しようというプロジェクトが持ち上がり、私もその共同主幹となったが、実際には大学教員としての仕事もあり、なかなか日本を留守には出来ない状況にあった。そこで、ほぼ訓練を終えていた山口君を私の代理として欧州の古典籍書誌調査に派遣することになった。

いよいよイギリスに発とうとする直前、亀井孝先生は、山口君を当時初台（東京都渋谷区）にあった研究室に呼んで、一冊の本を餞別として与えられた。それが、ここに紹介をしようとする『魁本大字諸儒箋解古文真宝（後集）』である。この本を亀井先生が、どういう経緯で手に入れられたか、それは何も知らない。先生は、驚くような名品をいくつも持っておられたが、その入手経緯などはまったく伺ったことがない。現在この本には一片の紙切れが付属していて、そこに山口君の筆でこう書いてある。

「一九九〇年三月十九日、亀井先生より渡英のはなむけとて頂戴せるものなり。師云、これは帰りの片道の旅費にあてよと。但、旅費を作らんためにこれを売却の際は林へ市場価格の二倍にて引き取らせよとのこと」

亀井先生らしい飄逸な言われようであるが、ともあれ、山口君は別に旅費に困りはしなかったので、この本はそのまま大切に彼の手許に保管されていた。



古文真宝叙

表紙

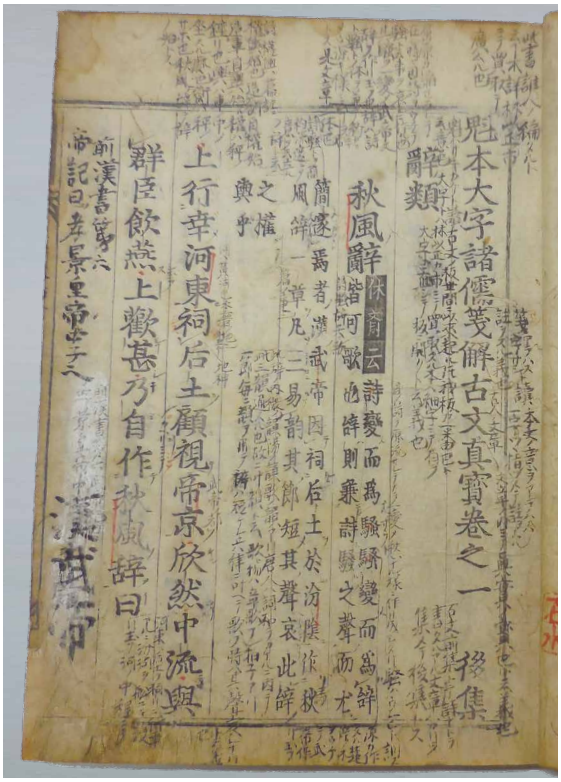
それから幾星霜、亀井先生も易簀され、私はそれ以前からただひたすら孜々として『古文真宝』を蒐集すること四十年に及び、それは四五〇点を超えるコレクションとなった。

しかし、東日本大震災や原発事故を経験して、このコレクションを私蔵していることのリスクに思い至り、ほぼ全点を国文学研究資料館に移譲することにした。そうして、今その書誌調査の研究会が行われているところである。【国文研・特定研究「日本の近世における中国漢詩文の受容―三体詩・古文真宝の出版を中心に―」（代表：高橋智　慶応義塾大学附属研究所 斯道文庫教授）】これを知った山口君は、ぜひ自分の手許の『古文真宝』も私の蒐書と一つにして後世に残したいと希望して、私はその希望を容れることにした。その殆どは比較的状態の良くない整版本であったが、ただひとつ、至宝ともいうべき一点が含まれていた。それがこの亀井先生から餞別として頂戴したという古活字版一冊であった。私は亀井先生の教えを遵守して、これを含めて山口君蒐集の『古文真宝』を、適切な値段で山口君から買い取って国文研に寄贈することにした。天国の亀井先生もきっとそれを喜んで下さるだろうと思ったからである。

さて、この本は川瀬一馬氏の『（増補）古活字版之研究』にも未載の珍しい版で、惜しむらくは上巻のみの零巻である。しかし、その堂々たる大きさといい、風格ある大ぶりの字体といい、江戸初期の刊行と見てよく、巻頭に「仁和寺心蓮院」の朱印を捺存するから、古く仁和寺に在ったものであることは疑いない。その他にも「石水」という近時の朱印などを存するが、それらの来歴は不明である。後表紙見返に、「石井卯之松主」か（？）と読める墨書があるが、これも誰であるか未考である。ほかに「K.TAKASHI 蔵」とある朱印は亀井師の蔵印である。

現丹表紙は江戸初期頃の古いものではあるが、古表紙による改装と見られ、天地に若干の断截が認められる。

古活字版として見た時、零巻ながら風格ある尤品であるだけでなく、墨朱両筆で施された詳密な書入れがあって、これも字風からすれば江戸前期を下らない筆であろうと見られる。かれこれ、この本は『古文真宝』の刊行史と研究史の両面に於いて意義ある伝本であろうと思われ、これを国文研の『古文真宝』コレクションに加えることを得たのは、私の大きな喜びとするところである。



本文巻頭

（原寸大）

（原寸大）

近代茨城のジャーナリスト・長久保紅堂の「発見」

―連携研究「大震災後における文書資料の保全と活用に関する研究」と茨城史料ネット―

西村　慎太郎（国文学研究資料館准教授）

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災から 4 年半の月日が流れた。その間、国文学研究資料館のアーカイブズ学関係教員は「東日本大震災における被災紙資料の保存と活用に関するソリューション研究」（代表・青木睦）、「大震災後における文書資料の保全と活用に関する研究」（代表・西村慎太郎）という 2 つの人間文化研究機構連携研究を展開し、被災地の文化資源復興と活用を進めて来た。本稿はそのうち筆者が代表を務めた研究の概略と成果を述べつつ、そこで「発見」された長久保紅堂という近代の地方ジャーナリストについて照射するものである。

人間文化研究機構連携研究「大震災後における文書資料の保全と活用に関する研究」のひとつの柱として、東日本大震災被災地の人間文化資源の復興があった。そこで筆者は茨城・福島県の被災地における人間文化資源の保全活動にたずさわっていた「茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク」（略称、茨城史料ネット）と、その活動に協力していた東京の NPO 法人歴史資料継承機構の活動を踏まえ、茨城・福島県内における被災文書資料のデータ化と被災地におけるレスキュー活動の実践と方法論の模索を行なった。詳細は『第 7 回人間文化研究機構資源共有化研究会』（2012 年 10 月 12 日）において「地域歴史資料と「移動する歴史資料たち」の問題を考える」、『名古屋大学文書資料室シンポジウム　東海大地震からアーカイブズをどう守るべきか』（2013 年 2 月 7 日）において「民間所在資料散逸の要因」で述べたが、茨城県内の 4 文書群 5751 点、福島県内の 3 文書群 3180 点をデータ化し、茨城史料ネットに提供した。茨城史料ネットからは所蔵者・地元自治体に提供されている。

ここで簡単に茨城史料ネットという団体について触れてみたい。茨城史料ネットは東日本大震災後の 2011 年 7 月に茨城大学の高橋修教授を中心として発足し、県内外の被災歴史資料の救済・保全を進めている。東日本大震災後の茨城県における民間所在資料の保全に大きな役割を果たしている団体と言えよう。活動の主体は茨城大学の教職員と大学院生・大学生である。活動の詳細については、同ホームページや茨城史料ネット編『身近な文化財・歴史資料を救う、活かす、甦らせる　茨城史料ネットの活動紹介パンフレット』（茨城史料ネット、2014 年）を参照されたい。

茨城史料ネットが被災した人間文化資源の救済を行い、保全活動を行なった資料群のひとつとして北茨城市赤津重衛家資料がある。同資料群の詳細については茨城史料ネットによる報告を待ちたいが、保全活動後の成果の地域還元として、2014 年 1 月 28 日から 3 月 2 日にかけて北茨城市民俗資料館（野口雨情記念館）にて『発見‼土蔵の中の文化遺産（たからもの）』と野口雨情生家・資料館にて『長久保紅堂　―雨情との友情―』という特別展示を行った。加えて、地域の方がたとともに同資料群の歴史的意義を共有して議論するために、講演会『被災した歴史資料を語る　北茨城の歴史』を開催した。筆者も「蔵から飛び出した『飄軽者』、長久保紅堂」と題する研究報告を行ない、当連携研究は特別展示・講演会に協力として名を連ねた。

では、筆者が報告をした長久保紅堂とは何者で、何故被災した人間文化資源の救済・保全活動の中で登場してきたのか。長久保紅堂による書簡がレスキュー活動の中で「発見」されたのは 2012 年 3 月末の保全活動であった。数千点に及ぶ文書資料の目録作成を行なっている時、一点の不思議な文書資料が目の前に現れた。封筒の消印は明治 30 年代後半、「常総新聞社」の毒々しい血色の木版刷原稿用紙に、マス目を意図的に無視した言文一致体の文面。筆者は北茨城地域の資料群にこのような書簡が混じっていたことについては興味を覚えた。これが長久保紅堂との最初の出会いである。

ここで長久保紅堂について説明しよう。以下は野口雨情生家・資料館特別展『長久保紅堂　―雨情との友情―』のパネルで筆者が記した一文である。

> 本名・長久保公敏は明治 17 年（1884 年）に茨城県南中郷村大字小野矢指（現在の北茨城市中郷町小野矢指）に生まれた。JR 高萩駅西口広場に悠然と建つ長久保赤水像は多くの人びとに親しまれているが、その赤水の子孫に当たる。
>
> 県立太田中学校（現在の太田一高）・県立龍ヶ崎中学校（現在の龍ヶ崎一高）を経て、明治 35 年早稲田大学に入学。病気によって退学し、茨城に戻ると、その文才を生かして常総新聞･いはらき新聞の記者として勤務し、大正 6 年には茨城民友社の社長に就任して、以後、『茨城民友』『学びの友』『茨城少年』の出版に取り組んだ。それらの新聞・雑誌では政治腐敗を弾劾する論説を発表しつつ、早稲田大学の同窓である野口雨情の詩を全面的に後援し掲載した。
>
> 人となりについて『茨城民友』大正 11 年 3 月号には「面白い男」「人懐つコイ男」「深刻味はないが賑やか」「飄軽者（ひょうきん者）」「飄逸な人」「呑気者」と評され

ており、時に奇声を発して周りの記者仲間を笑わせていた。県内の文壇を牽引する存在として活躍している最中の大正 11 年 1 月 30 日死去。享年 39 歳であった。

以上のような人物であり、紙幅の都合のため詳細は別稿に譲るものの、既述の資料郡の中には、当主の赤津鶴寿に宛てた紅堂書簡が十数点遺されていた。内容は、自身のお見合いのこと、金銭の無心、腸チフスに罹患している親族に対する心配（宛名の鶴寿や紅堂の前妻も腸チフスで亡くなっている）など。また、私信だけではなく、当時の茨城県内のジャーナリズムに対する内容も見受けられる。例えば次の書簡は明治 40 年 11 月 19 日付の抜粋である。

社内甚だしく乱れ相反目する有様と相成、誰れしも時と場合に依れば決して眠つて従ふものにあらず、我が意も張らねばあらぬことも存之候、第一は兎角政党上よりの関係より起りたるものにして小生と椎名惣介氏とは政友会機関紙に居りなから憲政党引き者と目せられ何事にも少々心よろしからぬ事のみ多く、あるにつけても益々意個地と相成遂に椎名氏は去る十日を以て断然退社いたし候、就ては小生孤立の身あまり心よろしからねば小生も本月限り退社する決心にて目下は出社も至さず下宿屋より只にわか病気の治療にのみ心をゆたね居る次第に候、これには色々と込み入りたる事情もあることにてあれば何れ御目もじの折りゆるゝゝ御話し申上べく候、されば小生は常総新聞社員たることは本月限りと御承知相成度く、それにつけても少しは閑散の身と相成るとても事の場合には換ひられぬものなればに候

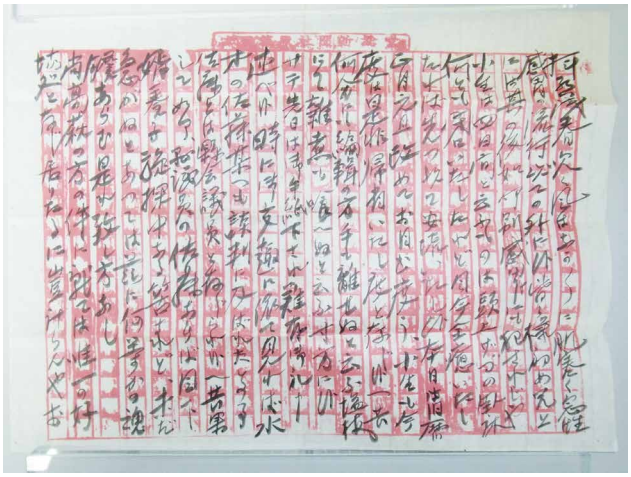
当時県内二位の発行部数の「常総新聞」記者であった紅堂だが、「憲政党引き者と目せられ」、社内に居づらくなっているため、退社の意向を示している。当時の茨城県政は政友会系の森正隆が明治 40 年に県知事就任し、同年県会選挙があり、明治 28 年より躍進を続けてきた旧改進党系（憲政本党）に翳りが見え始めてきた時期で、選挙後の臨時県会でも議長選出で紛糾している。

この書簡の直前の県会議員選挙についても、紅堂は赤裸々に述べている。次の書簡は明治 40 年 10 月 1 日付である。

多賀郡に於ける撰挙界に随分激烈の様子、（中略）就中気の毒に絶えざりしは本社長渡辺氏の落選に候、これは候補者間徳義を重んずる約束にて各自領分を守りゐたる処、其当日に至り徳義なとは何処へか飛び去り現〇にて買収を初められたる為め咄嗟の間に二百票の差を生じ落選とは由断大敵に候、

この書簡に登場する「渡辺氏」とは渡辺広治のことで、真壁郡会議員・下妻町長を歴任し、明治 31 年から県会議員を務めた人物である。渡辺広治は明治 33 年に常総新聞社を創立したが、この時の選挙では徳義を重んじたために「現〇」＝現金での賄賂を送らなかったために落選してしまったと述べている。

近代の地方ジャーナリストについて、佐々木隆氏は「史料の欠乏」「新聞人の具体的な行動がよく分からなかった」と評価しているが（佐々木隆『日本の近代 14　メディアと権力』中央公論新社、1999 年）、赤津家文書から発見された紅堂書簡はその一端を明らかにする重要な資料であろう。同時に文学研究としては野口雨情（「赤い靴」「七つの子」などの作者である詩人）が茨城の文壇の足掛かりを作った人物として紅堂は評価されているが（金子未佳『野口雨情　人と文学』勉誠出版、2013 年）、文学研究を取り巻くアーカイブズとして重要な資料と思われる。今後は資料群全体の中にこれらの書簡を位置付けていく作業が不可欠であり、茨城史料ネットとともに研究を進めていきたい。



赤津鶴寿宛長久保紅堂書簡（北茨城市赤津重衛家資料）

茨城史料ネットによる被災資料レスキュー作業

「国文学論文目録データベース」の、あまりよく知られていないこと

浅田　徹（お茶の水女子大学教授）

日本文学・日本語学の研究者なら、まず間違いなく利用したことがあると思われる、国文研の「国文学論文目録データベース」について、少しお話ししたいと思う。

私は1996年に、アルバイトの方々が入力していく論文データをチェックする「専門員」の一人となり、（館の専任教員だった時期を除き）現在までその職にあるので、書籍体の『国文学年鑑』時代から20年ほどこのデータベースに関わってきたことになる。この間にデータの採録の仕方もだいぶ変わり、近年は検索に掛けてもらうために相当に丁寧な作業が行われているのだが、そうしたことはあまり外部からは見えていないだろうとも思われる。

キーワードが入力されていること

このデータベースと競合関係にあるデータベースとしては、国立情報学研究所のサイニー、国立国会図書館サーチ、そして国立国語研究所の日本語研究・日本語教育文献データベースなどがある。サイニーが優れているのは本文PDFそのものにリンクされていることで、この利便性は言うまでもない。国会図書館サーチは採録文献の多様さにおいて圧倒的だし、とにかくアップロードが早いのがありがたい。国語研のデータは研究分野別の分類目録となっている点が優れている。

しかし、それぞれ短所もないわけではない。サイニーは紀要・学会誌類を中心としているが、かなり多くの学会誌が参加するようになったとは言え、まだ一部でしかない。また、国文学・国語学の研究では、出版社が商業出版物として作る叢書・論集類、また商業誌所収の論文が研究を引っ張っている面が大きく、こういうものは商業出版だから、サイニーの対象にはなっていないし、将来的にもPDFで無料で手に入ることは有り得ない。国文研のデータベースは、こうしたものも論文単位にバラして採録している。例えば、私の論文は、国文研のデータベースでは現在107本ヒットする。それに対しサイニーでは、同名異人のものを除くと50件ほどしかヒットしない。現状では採録量に大きな差があるのだということが、一般のユーザーには見えにくいのではないだろうか。

国会図書館サーチは、何でも引っ掛かるのはよいが、不要なデータがヒットしすぎる面も否めない。重複データも非常に多い。国語研は採録している雑誌等の総量がやや少ないように思う（ただ、ここにしかないものも多い）。

国文研のデータベースは、本文はもちろん付いていないが、タイトルだけを検索に掛けているのではない。もし国会図書館サーチで「記事・論文」に絞って検索するなら、タイトルの文字列に明示されているものだけが対象になる。例えば「源俊頼」と入力すると、現状では52件がヒットする。しかし、国文研のものでは312件がヒットする。これは、データ入力をしている時に、その論文の中で言及されている主要な「作者名」「作品名」を標準化したデータとして付加しているからである。そのため、「俊頼と好忠」のようにタイトルで「源」を欠くものでも、また「継子・鳥・鍋の歌―口承社会と書承社会と」のように表面上源俊頼とのつながりが見えないものでも、また「『金葉集』の白河院と堀河院」のように俊頼の著述に関するものでも、ヒットしているわけである。

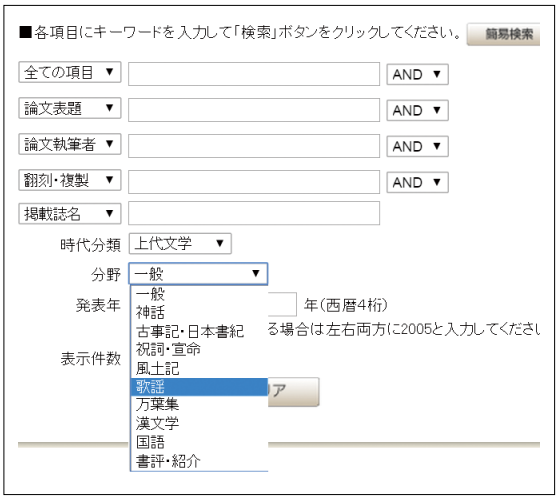
これは重要なことで、例えば、「夕顔巻の〇〇について」「浮舟の〇〇」のような、作品名が表に出ないタイトルの論文がよくある。こうしたものは、タイトルの文字列だけでは『源氏物語』の論文であることがわからないが、「作品名」が付加されていればヒットする。あるいは、タイトルに「蜀山人」とのみある論文でも、「大田南畝」で引けるように「作者名」データで手当てを施している（基本的には『国書総目録』の立項著者名を統合作者名にしてある）。

書籍体の『国文学年鑑』時代には、もちろんこんなことは想定されていなかったので、こういう情報が付加されているのは、ウェブ目録ということを意識して作るようになった近年の論文データに限られるが、しかしこの点はこのデータベースが大いに誇って良いことだと思う（その分、入力やチェックにも時間が掛かり、ご迷惑をお掛けしているのだが…）。

「詳細検索」でできること

国文学論文目録データベースでは、まず「簡易検索」画面が表示されるので、そればかりお使いになっている方がかなりいらっしゃるのではないだろうか。しかし「詳細検索」を使うと、違ったデータの探し方ができる。今回は、「時代分類」というカテゴリーについてお話ししたい。

「時代分類」ボタンを押すと、「国文学一般・国語・上代文学・中古文学・中世文学・近世文学・近代文学・国語教育」という選択肢が出る。これは要するに『国文学年鑑』時代の目次構成と同じものだ。さて、例えば「上代文学」をそこで選び、次にその下のボタン「分野」をクリックすると、「一般」「神話」「古事記・日本書紀」「祝詞・宣命」「風土記」「歌謡」「万葉集」



「漢文学」「国語」「書評・紹介」というプルダウン（上図参照）が出てくる。これも『国文学年鑑』時代の目次の踏襲なのだが、実はコンピューター入力になって以後の、すべての論文データに、こうした分類項目が付加されているのである。

ところで、「詳細検索」画面では、論文の刊行年を指定できる項目がある。すると、上記の分類項目と合わせれば、当該領域の「年間研究文献目録」ができることになる。例えば、2005年に中古文学の「日記・随筆」領域で刊行された論文は84本で、検索結果を「詳細表示」にしてプリントアウトにすれば、そのまま文献目録になる。このことは、あまり知られていないだろうと思う。

いま見た領域分類は、「時代分類」と「分野」までの二段構成だが、実は論文データにはもっと細分した枝分かれ項目が入力されている。例えば「中古文学」→「物語」までは一般ユーザーに見えているが、実はその下に「竹取物語」「うつほ物語」「落窪物語」といった個別のカテゴリーがあり、さらにその下に「総論」「各論」「語彙・文法」といったカテゴリーまであるのだ。これはもともと、この入力システムが書籍体の『国文学年鑑』に論文を順序よく整列させるために作られたからである。これらの下位分類名は特に公開されていないが（別に機密事項ではない）、実はその分類語でも検索で引っ掛かるようにしてある。「詳細検索」の「全ての項目」にそれを入力すると、検索することができる。

例えば、「全ての項目」に「青表紙本」と入力して検索してみて頂きたい。100件ほどがヒットする中に、「青表紙」という文字列がタイトルにない論文が大量に入っていることに驚かれるのではないだろうか。実は、『源氏物語』には特に下位項目がたくさんあって、「青表紙本」の伝本論という項目名が立っているのである。その他『源氏物語』では、各巻別の場面論については、当該の巻名も一応入力されている（網羅的ではないが）。ただし、今後はデータの取り方を簡略化する可能性があることをお断りしたい。

採録範囲の拡張

『国文学年鑑』の刊行が始まった昭和半ばには、「国語・国文学の論文」の範囲は明快だったと思われるが、近年、その範囲がどんどん膨張している。恐らく、外部の方が現在の採録現場を御覧になったら、こんなものまで採っているのかと驚かれるのではないかと思う。「近代文学」の「一般」で採録していたのは、以前は年間200本ほどだったが、今は政治・思想・美術等、関連領域の採録が増えて1000本を超えている。やや採りすぎている面もあるかと思われるのだが、載っていて困る人はいないという主義を取っている。

その他「簡易検索」で構わないので、「書誌」を検索すると書誌学関係の論文が4000点ほど、「南島文学」を検索すると沖縄の神話から現代文学に至るまで約2000点などがヒットする。アイヌ文化の論文も採っている。浮世絵や絵巻、茶道や生け花なども対象にしている。2005年頃には「サブカルチャー」という下位項目が設けられ、アニメ・マンガ・ゲームなど現在まで500点以上の論文を採録している。「宮崎駿」でヒットする論文は既に75点にのぼる（国文研にはサブカル系の雑誌はほとんど所蔵されていないから、あまりあてにされても困るが）。

皆様へのお願い

このデータベース作成に関わっている身として、皆様にまずお願いしたいのは、「とにかく宣伝を！」ということだ。検索件数の推移が毎年出されるのだが、確実に減少している。一番根本的な原因は、日本語・日本文学を学ぶ学生の減少であり、その内卒論を書く人（主要ユーザー）に限定すればもっと減っているだろう。これだけ手間暇を掛けて作っているものだし、海外発信という面でも重要な役割を果たしている事業なので、ぜひ、その有効性をアピールして頂きたいと願っている。

次に、「ぜひ雑誌の御寄贈を！」ということである。近年は諸大学等の学内学会誌が（学部改組等の関係で）減少している上に、プロジェクト予算対応の短期間限定のメディアが増えていて、そういうものに重要な論文が載ることもあるのだが、国文研に寄贈されない限り、論文目録データベースには採録されないのである。

また、これも近年、学会誌等をウェブにアップし、書籍体の方の作成や寄贈を取りやめるケースが多くなっている。我々は、ウェブ上にあるものを追跡して採録することはとてもできない。紙媒体も残しているのであればぜひ御寄贈願いたい。また既に紙媒体をやめてしまわれた場合は、できればプリントアウトを仮製本して御寄贈頂けないだろうか。特に若手の方にとっては、このデータベースに登録されていることは十分メリットがあると思われるので、ご配慮をお願いする次第である。

トピックス

第８回日本古典文学学術賞受賞者発表

「日本古典文学学術賞」は、財団法人日本古典文学会が主催していた「日本古典文学会賞」を継承し、若手日本古典文学研究者の奨励と援助を目的として、国文学研究資料館賛助会に設置されました。2015年で第8回を迎えます。

受賞対象者は、対象となる業績の公表時に40歳未満の研究者です（3名以内）。

選考委員会は、関連諸学会から選出された委員（うち、日本近代文学会からは選出者なし）ならびに国文学研究資料館賛助会運営委員会委員長と国文学研究資料館教員1名の7名で組織されています（下記「一覧」参照）。

第8回日本古典文学学術賞は、2014年1月から12月までに公表された日本古典文学に関する論文または著書（明治初期を含む）を対象業績として、選考委員及び過去の受賞者（日本古典文学会賞受賞者を含む）から推薦された対象者の業績について、選考委員会が厳正かつ慎重な審議を重ねました。選考の経緯は次の通りです。

○5月28日（木）　互選により委員長を選出。候補者4名の資格と業績を確認。
○6月25日（木）　候補者を2名に絞り、審議を継続。
○7月30日（木）　受賞者を合山（こうやま）　林太郎（りんたろう）氏（大阪大学大学院准教授）に決定。

授賞式は9月4日（金）にパレスホテル立川（立川市曙町）で開催され、選考委員会の大津雄一委員長による選考経緯の報告と、内田保廣委員による選考講評がありました。引き続いて同ホテルで記念パーティーが催され、受賞者を囲んで歓談しました。

◆選考委員一覧

○小川（おがわ）　靖彦（やすひこ）（上代文学会 / 青山学院大学教授）
○小嶋（こじま）　菜温子（なおこ）（中古文学会 / 立教大学教授）
○大津（おおつ）　雄一（ゆういち）（中世文学会 / 早稲田大学教授）＊委員長
○内田（うちだ）　保廣（やすひろ）（日本近世文学会 / 共立女子大学教授）
○田渕（たぶち）　句美子（くみこ）（和歌文学会 / 早稲田大学教授）
○寺島（てらしま）　恒世（つねよ）
（国文学研究資料館賛助会運営委員会委員長 / 国文学研究資料館副館長）
○神作（かんさく）　研一（けんいち）（国文学研究資料館教授）

左：大津 雄一 委員長　右：受賞者 合山 林太郎 氏

第８回日本古典文学学術賞選考講評
日本古典文学学術賞選考委員会

合山林太郎氏の『幕末･明治期における日本漢詩文の研究』（和泉書院、2014年2月刊、A5判332頁、本体7500円）は、2012年に東京大学へ提出した博士論文を母体とした研究書であり、その内容は天保末頃から明治後期（1840～1900年代）に至る日本漢文学の動向を、漢詩を軸に据えて考察したものである。全巻は一貫しており、前半はやや広い視点から、後半は個別的な内容で論述するが、全体を通じて、近世漢詩史に立脚し、明治詩歌史への展開を動的に捉えたものと言える。

全体の構成は次の通り。＊各章の大半に副題が添えられるが、紙幅の都合により今これを割愛した。

序　章
第一部　幕末・明治期の社会と漢詩文文化
　第一章　漢文による歴史人物批評
　第二章　明治初期の漢詩と結社
　第三章　青少年期の森鷗外と近世日本漢文学
　第四章　漢詩改良論
　第五章　明治期の時事批評漢詩
　第六章　『しがらみ草紙』の「詩月旦」
第二部　幕末･明治初期における漢詩の潮流と漢詩壇の動向
　第一章　性霊論以降の漢詩世界
　第二章　幕末京坂の漢詩壇
　第三章　幕末・明治初期の遊仙詩
　第四章　幕末・明治初期の詠物詩
第三部　森槐南と新世代の漢詩人たち
　第一章　幕末・明治初期の艶体詩
　第二章　漢詩における明治調
　第三章　森槐南の読書歴
　第四章　森槐南と呉汝綸
第四部　野口寧斎の生涯と文学
　第一章　野口家一族と幕末の文人社会
　第二章　野口寧斎の前半生
　第三章　野口寧斎の後半生
資料『漁洋山人精華録訓纂』への森槐南自筆書入れ
初出一覧
あとがき
主要人名・書名・作品名索引

本書の目的は、平安・江戸と並んで隆盛を極めた明治漢詩の基盤を、江戸からの連続体として認識するとともに、その実態を解明する所にあったと見ることができる。そのために著者は、まず、幕末における「漢詩文文化」の存在を措定（そてい）し、その展開を、文学史と文芸思潮を批判的に捉えながら、関連を動態的に記述している。既成の文学史に対して、やや固定化して準拠する傾向が見られたものの、氏の構想はおおむね奏功していると言えるであろう。

「清新論的文学観」（中村幸彦）もしくは「性霊論」（揖斐高）が主流として高く評価されてきた江戸後期にあって、それに反するように、なお多くの古文辞を重用する漢詩人が存在した事、詠物詩や遊仙詩など知的、または技巧が重用される作品が多作されていたことなどへの疑問が、明治への長い射程の中で、個々の事例に即して実証的に説明されている。他方、「性霊論」以降の漢詩が徐々に平板に堕してゆく様相も照射され、両々相俟って幕末明治の漢詩文が抱えていた根深い問題点を剔抉（てっけつ）している。政治や戦争漢詩など、旧幕時代には題材たりえなかった新時代の諸問題も含みつつ、〈古典から近代へ〉という転換期に漢詩文が有した「意味」が、繰り返し問われている。

文体はいたずらに佶屈（きっくつ）することがなく自然で安定感があり、論述の姿勢にも無理はないが、強いて言えばところどころ批判の言辞が表層をなぞるに留まっている箇所が見受けられるのは瑕瑾（かきん）であろう。〈政治の季節と漢詩文〉という壮大なテーマも個別事象の分析による見通しの提出に留っているほか、狂詩に対する配慮や、漢詩文を超えた文学ネットワークへの視点、さらには同時代の和歌（短歌）が抱えた問題点との共有といった大きな問題についても十分に説明されているわけではない。そもそも、取り上げた漢詩人の選択にも限界があり、例えば、可能性を秘めながら夭折した香奩体（こうれんたい）の漢詩人中野逍遥などへの史的考察なども欲しいと感じられた。

しかしながら、幕末から明治期にかけての漢詩文の様態をひとすじの〈線〉で捉えた手法は確かなものであるし、また、森槐南や野口寧斎の分析を通して明治詩文の動向を的確に活写した点は評価すべきものと言える。春秋に富む氏の将来性を高く評価し、また、多くの分野の研究者に刺激を与えることの出来る研究業績として、選考委員会は全会一致で、合山林太郎氏を第8回古典文学学術賞の受賞者として決定するに至った。

（文責　内田　保廣）

文部科学省における当館大型プロジェクトの展示

本年8月から11月まで文部科学省の旧館の情報ひろばで、文科省と大学･研究機関との共同企画広報の一環として、当館の展示が行われています。展示は、当館の紹介とともに、当館が平成26年から10年計画で取り組んでいる大型プロジェクトについて紹介しています。このプロジェクトは、文科省の大規模学術フロンティア促進事業の中で、文系初の事業として採用されたもので、「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」というものです。日本語で書かれた古典籍のうち30万点の画像を収集し、それを画像データベース化して世界中に公開し、それらを用いて国際研究を促進するという壮大な計画です。古典籍の中には、従来あまりよく知られていなかった医学や数学（和算）などの幅広い分野のものが積極的に集められます。

また、このプロジェクトは、古典と現代とのつながりも重視しており、人気アニメ「Naruto―ナルト―」と江戸時代の『児雷也豪傑譚（じらいやごうけつものがたり）』とのつながりについても展示しています。このつながりについては、11月5日（木）に文科省の情報ひろばのラウンジで、八王子市立みなみ野君田小学校の皆さんを招いて、当館教員山下則子教授の特別授業が行われます。

（田中　大士）

第 39 回　国際日本文学研究集会
主催：国文学研究資料館　後援：総合研究大学院大学

平成 27 年 11 月 14 日（土）

受付開始 …… 12：00〜
総合司会　伊藤（イトウ）　鉄也（テツヤ）（国文学研究資料館教授）

開会挨拶　今西（イマニシ）　祐一郎（ユウイチロウ）（国文学研究資料館長）…… 13：00〜13：10

【第1セッション】　司会：坂本（サカモト）　信道（ノブユキ）（京都女子大学教授）

研究発表　[1] **上代日本における文字表記** …… 13：10〜13：40
―『万葉集』の「青」と「あを」を中心に―
松原（マツバラ）　舞（マイ）（東京大学大学院博士課程）

[2] **古事記における世界の生成とシャーマニズム** …… 13：40〜14：10
―「根堅州国」と「綿津見神宮」をめぐって
ANDASSOVA Maral（アンダソヴァ マラル）（佛教大学総合研究所特別研究員）

[3] **源氏物語の「女にて見る」をどう訳すか** …… 14：10〜14：40
―翻訳のなかのジェンダーバイアス―
須藤（スドウ）　圭（ケイ）（立命館大学助教）

休憩（15分） …… 14：40〜14：55

【ショートセッション】　司会：海野（ウンノ）　圭介（ケイスケ）（国文学研究資料館准教授）

① **『とはずがたり』巻二に描かれた「色好み女房」としての自画像とその意義** …… 14：55〜15：10
邱（キュウ）　春泉（シュンセン）（北京外国語大学博士課程、国文学研究資料館外来研究員）

② **佐倉孫三から提示される台湾先住民像** …… 15：10〜15：25
―機関誌『蕃界』（1913）への寄稿を中心に―
黄（コウ）　幼欣（ヨウキン）（南台科技大学准教授）

③ **村上春樹『海辺のカフカ』にみる魔術的世界観の土壌** …… 15：25〜15：40
DALMI Katalin（ダルミ カタリン）（広島大学大学院博士課程）

③ **村上春樹による聖地アトスへの巡礼** …… 15：40〜15：55
王（オウ）　静（セイ）（名古屋大学大学院博士課程）

休憩（15分） …… 15：55〜16：10

【第2セッション】　司会：小山（コヤマ）　順子（ジュンコ）（国文学研究資料館准教授）

研究発表　[4] **『草庵集』の構成と特性** …… 16：10〜16：40
李（イ）　相旻（サンミン）（東京大学大学院博士課程満期退学）

[5] **欧米における「忠臣蔵」のイメージ形成** …… 16：40〜17：10
―大石内蔵助の人物描写について―
川内（カワウチ）　有子（ユウコ）（立命館大学大学院博士課程）

事務連絡・会場移動 …… 17：10〜

レセプション …… 17：30〜18：30

平成 27 年 11 月 15 日（日）

受付開始 …… 9：30〜
総合司会　青田（アオタ）　寿美（スミ）（国文学研究資料館准教授）

【第3セッション】　司会：野網（ノアミ）　摩利子（マリコ）（国文学研究資料館助教）

研究発表

[6]「父親の不在」を文学は告げている?『なずな』におけるイクメン … 10：00〜10：30
GUARINI Letizia（グアリーニ レティツィア）（お茶の水女子大学大学院博士課程）

[7] 中里介山「大菩薩峠」の文体 …… 10：30〜11：00
――改稿による地の文の変化を手がかりに
崔（チェ）　惠秀（ヘス）（早稲田大学大学院博士課程）

[8] 武田泰淳の文学における父親のイメージ …… 11：00〜11：30
HARTLEY Barbara（ハートリー バーバラ）（タスマニア大学アジア言語研究学科長）

[9] 語られない韓国―高浜虚子の小説『朝鮮』 …… 11：30〜12：00
劉（ユ）　銀炅（ウンキョン）（中央大学大学院留学生）

休憩（120分）　昼食・ポスターセッション …… 12：00〜14：00

【シンポジウム】「日本文学の越境―非・日本語でHaikuを読む／詠む―」 …… 14：00〜17：30
司　会　深沢（フカサワ）　眞二（シンジ）（和光大学教授）
パネラー：木村（キムラ）　聡雄（トシオ）（日本大学教授）
FESSLER Michael（フェスラー マイケル）（日本エズラ・バウンド協会役員）
GURGA Lee（ガーガリー）（アメリカ俳句協会元会長）
鳥羽田（トッパタ）　重直（シゲナオ）（和洋女子大学教授）

総括　17：00〜17：10

【ポスターセッション】11月14日（土）〜11月15日（日）（発表者による説明あり）

- **『徒然草』の地名新考**
  黄（コウ）　昱（イク）（総合研究大学院大学博士課程）
- **漱石の『琴のそら音』――空想の思いを馳せた不安――**
  呉（ゴ）　雪虹（セツコ）（高雄市立空中大学外国語学系主任）
- **戦略としての手記―太宰治『人間失格』における額縁構造と「道化」―**
  田村（タムラ）　美由紀（ミユキ）（総合研究大学院大学博士課程）
- **川端康成『抒情歌』再考―近代における“口承文芸”の可能性と限界―**
  大久保（オオクボ）　美花（ミカ）（明治大学大学院博士課程）
- **『うつほ物語』の計量分析：**
  「楼の上上」及び「楼の上下」における形容詞・形容動詞の量的特徴について
  土山（ツチヤマ）　玄（ゲン）（同志社大学研究開発推進機構特別任用助教）
- **＜新作薫物＞と平安文学―王朝の言葉とこころを具現化した香りたち―**
  田中（タナカ）　圭子（ケイコ）（広島女学院大学総合研究所　客員研究員）

日本学術会議と公開シンポジウムを共催

日本学術会議の言語・文学委員会が主催し国文研が共催する公開シンポジウム「日本語の歴史的典籍データベースが切り拓く研究の未来」を、7月25日に日本学術会議講堂において開催しました。このシンポジウムは、現在国文研が国内外の大学・研究機関とともに取り組んでいる文系初の大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」が、日本学術会議の策定した「学術の大型研究計画のマスタープラン」に基づいていることにちなみ、スタートして2年目を迎えた本事業についてさまざまな分野の研究者へのいっそうの周知をはかるとともに、本年度から本格的に構築が始まった日本古典籍を網羅したデータベースによって導かれる研究の新たな進展のイメージを共有することを目的として開催されたものです。

シンポジウムでは、日本学術会議の長島弘明氏（東京大学教授）による開会の挨拶をうけて、当館館長今西祐一郎が「日本語の歴史的典籍データベースの構想」と題し、本事業のこれまでの経緯と、かつてない規模の古典籍データベースを構築しそれにもとづいた共同研究を推進するという本事業の目的についてあらましを説明し、医学・理学分野から開始されているデータベース構築計画について具体的に示しました。

続いて、四人の研究者が、それぞれが取り組んでいる具体的な研究をもとに、本事業への期待を込めた報告をおこないました。

上野健爾氏（四日市大学関孝和数学研究所長）は、「和算資料が示唆する数学の将来」と題し、江戸時代の和算の文化についてわかりやすく説かれました。中国からもたらされた伝統数学を継承しそれをさらに高度に発展させた関孝和を頂点とする江戸時代の和算は、一方で、多くの庶民たちからなる和算愛好家によって支えられており、身分や男女の違いを超えた数学塾が全国に展開していました。この和算の文化は、各地に残されている算額をはじめ多くの写本・草稿などの資料として残されており、それらは今日の学問のあり方を見直す貴重なヒントを与えてくれるという指摘がなされました。

「文理にまたがる古医書の研究」と題して報告したミヒェル・ヴォルフガング氏（九州大学名誉教授）からは、それぞれの地域において家業として何代にもわたり継承されていった日本の医術のあり方が世界史的にみても特殊なものであり、そうした背景のもとに各地域において形成されてきた医学関連の厖大な資料が、欧米の研究者の注目を集めつつあることが紹介されました。それらの資料に含まれる、文芸関係資料や図像などについては、今後、文系と理系の研究者が共同で研究する必要があることも示されました。

原田信男氏（国士舘大学教授）による「日本古典籍からみた料理文化の展開―料理書から料理本へ」と題した報告では、古来、宮中や武家などの社会の一部の生活圏の中で作成され、主として写本として伝承されてきた「料理書」が、江戸時代になってひろく庶民へと解放され「料理本」として刊行されていく過程に日本の食文化が成立することが具体的な事例をあげて語られました。江戸時代後期には、料理本に文芸の要素が加味され独自の世界を繰り広げたことも示されました。

内田慶市氏（関西大学図書館長）からは、「東アジア文献アーカイブスの現状と未来」と題し、関西大学の東アジアアーカイブスを中心となって構築してきた経験にもとづいた報告がなされました。国家プロジェクトとして進められている諸外国における文献データベース構築の現状が紹介され、幅広い分野の研究者が参加してデータベースを構築していくために留意すべき点など、本事業で構築するデータベースへの積極的な提言がなされました。

シンポジウムには、主催した言語・文学委員会の三つの分科会（科学と日本語、古典文化と言語、文化の邂逅と言語）のメンバーを含む134名が参加し、報告者との討議を行った後、日本学術会議の木部暢子氏（国立国語研究所副所長）の閉会の挨拶をもって終了しました。

（谷川　惠一）

会場の様子

討議の様子

第１回日本語の歴史的典籍国際研究集会「可能性としての日本古典籍」

2015年7月31日（金）から8月1日（土）にかけて、第1回日本語の歴史的典籍国際研究集会「可能性としての日本古典籍」が、当館大会議室において開催されました。文部科学省が推進する大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」により、昨年度から2つの国際共同研究、5つの公募型共同研究、4つの拠点主導型共同研究、9つの機構内共同研究が開始していますが、本集会ではこれらの共同研究が、どのような取り組みを行っているか、またはこれから行おうとしているのかを、ひろく研究者や学生に伝えることによって、共同研究の裾野を拡大させるとともに、実施している共同研究の相互間の交流をはかろうとするものです。

まず、今西裕一郎館長の挨拶にはじまり、立本成文人間文化研究機構長、来賓からは牛尾則文文部科学省研究振興局学術機関課長にご挨拶いただきました。次いで谷川惠一副館長から本プロジェクトについての趣旨説明後、有川節夫氏（前九州大学総長）の基調講演「古典籍共同研究とオープンサイエンス」がありました。

研究成果をひろく市民に公開し、情報の共有化をはかろうとする「オープン・サイエンス」は、近年とみに注目されていますが、有川氏はさらに進めて、特定の研究機関に所属しないアマチュアの研究者や、一般市民が研究に参加する、「シチズン・サイエンス」がもたらす可能性を示唆しました。本プロジェクトは、日本語の歴史的典籍30万点の画像データ化を目指していますが、データをオープン化することで、誰もがオリジナル資料の画像を自由に閲覧でき、新たな学術研究が展開し、イノベーションされ、異分野融合とも結びついて、将来的に「共同研究ネットワーク」の構築に繋がっていくことが期待されます。

パネル・セッションでは、画像データベースに関する研究発表に注目が集まりました。パネル1「古典籍研究の近未来」では、寺沢憲吾氏（公立はこだて未来大学）が、いわゆる光学文字認識（ORC）とは異なる、条件として与えられた画像と、似た画像を検索して出現位置を特定する「文書画像検索システム」について、橋本雄太氏（京都大学大学院）が、遠隔地や海外在住の研究者たちの場所的能力的制約を解消し、よりスムーズに共同研究が行える、史料画像の翻刻・研究支援ソフトウェア「SMART-GS」のオンライン版について、それぞれ紹介がありました。文字情報を解読する負担が大幅に軽減されれば、「くずし字」を読むことができない非専門家だけでなく、大量の歴史的典籍を扱う専門家にとっても、たいへん強力な研究支援ツールとなりそうです。

また、北本朝展氏（国立情報学研究所）からは、デジタルデータの様々な活用例や、フィールドワークを通じたシチズン・サイエンスの実践例、永崎研宣氏（人文情報学研究所）からは、SAT 大蔵経 DB の取り組みについての報告があり、どちらも非常に興味深い内容でした。

最後に山本和明古典籍共同研究事業副センター長から、国文学研究資料館所蔵の古典籍約300点（全冊約52,000コマ）の画像データと書誌データをデータセットとして、国立情報学研究所（NII）の情報学研究リポジトリ（IDR）を通じ、CC ライセンス「CC BY-SA」で、2015年10月頃に公開される予定であることが公表されました。

2日目の基調講演では、ピーター・コーニツキー氏（Peter Kornicki・ケンブリッジ大学）の「国際共同研究の意義―古活字版の終焉に向けて」では、コーニツキー版欧州日本古書総合目録を研究基盤とした、江戸時代初期出版の印刷文化・書物文化について、附訓本の問題を交えながら、紹介がありました。パネル2「総合書物学への挑戦」は、従来の書誌学や文献学を見直し、新たに「総合書物学」という立場から、画像データベースを利用した新しい研究についての提案がありました。パネル3「紀州地域と寺院資料・聖教―延慶本『平家物語』の周縁―」は、紀州地域の寺院資料をはじめとする歴史的典籍の分析を通じ、人文・社会科学系諸領域との情報共有を旨とする「紀州地域学」の形成について、パネル4「キリシタン文学の継承：宣教師の日本語文学」では、幕末から近代にかけて日本を訪れた宣教師たちが記した書物が、日本文学にもたらした影響について、などの発表がありました。

2日間にわたって充実した内容となりましたが、ディスカッションに充分な時間を取れなかったセッションもあり、発表終了後も活発な意見交換が行われていました。また、大会議室前には各共同研究の研究概要を紹介したポスターが掲示され、当日の様子がツイッターなどの SNS によって、リアルタイムに配信されるなど、本プロジェクトに対する高い関心と、新しい可能性をうかがわせる国際研究集会となりました。（井黒　佳穂子）

国際研究集会の様子

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

■平成28年4月入学　入学者募集

平成28年度の入学者を、下記のとおり募集します。

課　　程：大学院博士後期課程
取得できる学位：博士（文学）
募集人数：3名
選考方法：書類選考、論文審査、面接（平成28年1月28日～29日に実施）
願書受付期間：平成27年11月27日（金）～12月3日（木）
http：//www.nijl.ac.jp/~kyodo/soken.files/enter/

■学術交流フォーラム2015について

文化科学研究科主催の学術交流フォーラムを、今年度は当館で開催します。多数のご参加をお待ちしております。

開催日：平成27年11月21日（土）～11月22日（日）
会　場：国文学研究資料館大会議室
主なプログラム：

11月21日（土）13:30～17:40	
13：30～	口頭発表
16：40～	ポスター発表

11月22日（日）11:00～16:30	
11：00～	口頭発表
13：30～	展示ギャラリートーク
14：20～	講演会・パネルディスカッション

講演1：碁盤の上のからくり人形
武井協三（国文学研究資料館 名誉教授）
講演2：ロボットとからくり―科学と芸能の狭間を生きた田中久重―
山田和人（同志社大学文学部 教授）

■学会報告

佐々木比佐子（日本文学研究専攻 博士後期課程）

2015年度和漢比較文学会第8回特別例会が、8月29日から9月1日まで中国陝西省西安市の西北大学と臨潼陝西省療養院を会場として開催され、研究発表の機会をいただきました。

私の研究発表は「斎藤茂吉の学書―中林梧竹の書法―」の題目で、明治25年の東北の農村に生活する少年茂吉に、清朝考証学に淵源をもつ六朝書法が、清国に渡り北京で学んだ書家中林梧竹からどのように伝わり、それはどのような内容であったか、及びその影響を論じたものです。中林梧竹の書いた「片仮字帖」を茂吉が朱を用いて臨書した「梧竹臨写帖」はよく知られていましたが、その手本である梧竹の書いた原本は所在不明とされて来ました。この原本は2010年に斎藤茂吉記念館に寄贈され、私は2013年に書誌調査を行わせていただき、研究はこの書誌調査を基として進めることが可能となりました。そして本研究をさらに進めて行くうちに、清国の人々と日本の人々との深い交流が見えてきました。

西北大学の心温まる歓迎を受けながら、現代の私たち日中の学生・研究者も、かのような先人たちの文化交流の営みに確かにつながっている事を、随所において実感させられた特別例会でありました。

なお、書誌調査と今回の特別例会への参加は、総研大の学生支援事業によるものです。

特別例会参加者

閲覧室カレンダー　2015年11月～2016年1月

■青は休館日　■黄色は土曜開館日

2015年11月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

2015年12月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

2016年1月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

●開館：9：30～18：00　●請求受付：9：30～12：00,13：00～17：00　●複写受付：9：30～16：00

ただし、土曜開館日は、

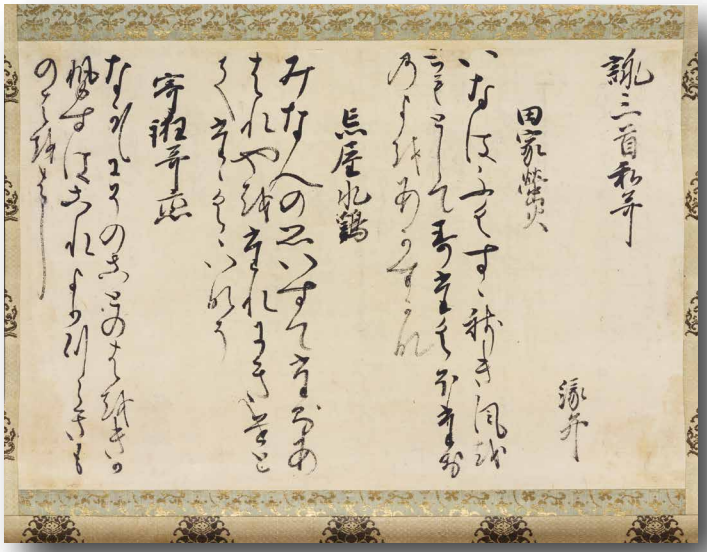
●開館：9：30～17：00　●請求受付：9：30～12：00,13：00～16：00　●複写受付：9：30～15：00

表紙絵資料紹介

『春日懐紙』（縁弁（えんべん）「田家螢火（でんかほうか）」）［当館蔵　新収］

春日懐紙は、13世紀中頃に奈良春日社（春日大社）周辺で行われた和歌会で用いられた和歌懐紙（和歌会に持参する自詠を書き留めた料紙）。春日若宮社神主の中臣祐定（なかとみのすけさだ）は、それら使用済みの懐紙の裏に万葉集（春日本万葉集）を書写した。したがって、本来この資料には裏表にそれぞれの和歌が写されているのだが、江戸時代になり、懐紙面が珍重されるあまり、万葉集面の多くが剥がされて、消失した。この一枚は、当館蔵の春日懐紙（全部で31枚。うち、25枚は重要文化財）の中で最も最近収蔵されたもの。縁弁（経歴不詳）の「田家蛍火」を第一歌題とする懐紙（縦29.1cm×横42.9cm）。当該の題の春日懐紙は全部で9枚知られている。同じ和歌会の際のものと考えられる。当館蔵品の中にも学詮（経歴不詳）の懐紙がある。裏はほとんど失われているが、万葉集の巻十の一部であることがわかっている。

（田中　大士）



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
Tel：050-5533-2910 Fax：042-526-8604

発行日　平成27年（2015）10月16日
編　集　国文学研究資料館広報出版室
印刷所　株式会社 アズディップ
ⓒ人間文化研究機構国文学研究資料館

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。